

第 63 回 (公社) 全日本鍼灸学会学術大会 愛媛大会 シンポジウム 3

タイトル：各種連携のなかでの鍼灸による認知症への取り組み

所属： 学校法人後藤学園中医学研究所

氏名： 兵頭 明

【要旨】

昨年の敬老の日に総務省は 65 歳以上人口が 3074 万人、70 歳以上が 2256 万人、75 歳以上が 1517 万人、80 歳以上が 893 万人との推計を発表している。高齢者の健康長寿のサポート、健康寿命の延伸、不定愁訴の改善、そして認知症の予防と改善といったテーマに対して、鍼灸治療の役割と可能性について一緒に考えてみたい。

一、認知症に対する鍼灸治療の可能性をさぐる

認知症に対する鍼灸治療の可能性さぐるため、2009 年 10 月 31 日に文部科学省戦略的基盤研究・社会連携研究推進事業の一端として、「認知症に東洋医学が挑む」というテーマで認知症国際フォーラムが川崎にて開催された。その際にパネリストとして中国から招聘された天津中医薬大学・第 1 付属病院の韓景猷院長は、健康長寿の考えをベースにした脳老化と骨老化に対する鍼灸治療（韓景猷方式：三焦鍼法）の効果について発表し、さらにアルツハイマー病と血管性認知症 435 症例の患者を対象とした鍼灸治療により、MMSE（認知機能検査）のスコアの改善、日常生活動作（ADL）の改善がはかられたことを報告した。

これがきっかけとなり、後藤学園中医学研究所は社団法人老人病研究会（認知症国際フォーラム開催団体）と共同で介護付有料老人ホームにおいて施設連携、家族連携をベースとし、本人や家族の同意のもとで 1 名のアルツハイマー病の入居者、軽度認知障害の疑いのある 2 名の入居者に対して 1 年にわたって韓景猷方式を実施し、天津とほぼ同等の効果が得られることを確認した。

二、各種連携のなかでの専門鍼灸師育成の取り組み

日本においても認知症に対する三焦鍼法の治療効果の再現性が認められたことにより、社団法人老人病研究会は 2010 年 10 月に第 1 回統合医療による認知症 Gold-QPD 育成講座（後藤学園後援）を開講することとした。認知症に対する高度な西洋医学的知識（神経内科、精神科）を学習し、東洋医学の専門性（統一体観）を兼ね備え、そして認知症の方や高齢者への接遇介護法を身につけ、所定の鍼灸技能（韓景猷方式）を実践できる専門鍼灸師の育成がスタートしたのである。昨年までに合計 5 回の育成講座が開催され、現在約 100 名の専門鍼灸師が在宅・入居施設・通所介護施設・鍼灸治療院・病院等にて認知症の方のサポートを行っている。

三、認知症に対する鍼灸治療の成果と今後の可能性

認知症 Gold-QPD 育成講座の研修生たちは現在、在宅・高齢者入居施設・通所介護施設・鍼灸治療院・病院といった種々の施術環境の中で認知症の方、および多くの不定愁訴を訴える高齢者に対して鍼灸による全人的総合的なアプローチを行っている。そこで求められるのは、施術環境の違いに応じた適切な対応である。本シンポジウムにおいては医療連携、

施設連携、家族連携をベースとして実践された症例報告にもとづいた一定の成果を報告する予定である。一部の症例報告は、鍼灸医学関連の専門誌ですでに連載報告をしているので参考にさせていただきたい。

認知症は現在の医学では治せないかもしれないが、各種連携をベースとした鍼灸による全人的総合的なサポートによって認知症の方の人格の尊厳を守り、一定程度ではあるが認知機能の維持または改善、周辺症状の緩和、ADLの改善、QOLの向上がはかれることは、一定の範囲内で可能だと思われる。また我々が得意とする東洋医学独自の統一体観にもとづいた全人的・総合的なアプローチとサポートが、認知症の方や高齢者が陥りやすい孤立感、閉塞感、自信喪失からの開放の一助となれば幸いである。